Ⅰ　令和２年度の運営総括及び来期の課題

平成 19 年 9 月の開館から丸 13 年を迎えた。今日まで、述べ 55 万人を超える来館者が、白根児童センターを利用してくれた。今年度は「コロナ禍」の中、いまだ経験したことの無い対応に追われた日々だった。4 月～5 月にかけて 3 週間程の臨時休館を経て、少しづつ子ども達の来館が増え、7 月頃から土日を中心に乳幼児親子が多く訪れ、『ハロウィン』、『クリスマス会』、『ちびっこ豆まき』などの季節行事を楽しみに参加してくれる様子がみられるようになった。また、小学生達も同時期に児童センターに来館し始め、館内に賑やかな声が戻ってきた事を実感し、こどもの笑顔と会話ができない児童館は児童館では無いという事を実感した年月でもあった。そして何よりも職員自身が「こどもが好き！」といった気持ちをあらためて思い起こせた日常だった。「コロナ」は悪い事ばかりではない。今一度立ち止まり、運営の見直しや、こども達に何をしてあげられるのか？何が必要か？と考える時間を与えてくれた。

たくさんの子どもたちと出会い、子どもたちの成長に寄り添ってきたごく当たり前の日常が、「コロナ禍」で変えられた。だからこそ、児童センターの中で過ごす子どもたちにとって、かけがえのない時間として積み上げられてきたことを痛感した。そして今後も地域資源を大切にし、人との関わりを大切にしていきたい。3 密、消毒、換気の徹底がメインとなった現在は、新型コロナウィルスの影響で利用や行事が制限されているが、利用者が安心・安全に利用でき、子どもたち、保護者の気持ちにより一層寄り添い、居場所となれるような運営を次年度も努力していきたいと思う。

１．乳幼児事業

（１）総括

乳幼児親子の中には母親のみならず、父親や祖父母の姿も多く見られた。頻繁に足を運んでくれる親子も多く、来館するたびに子どもの成長を共に実感することが出来た。南区の『子育てオーエンジャー☆みなみ』や『子育て安心ささえ隊 3739』の方々と連携を取りながら、子育てをする母親支援に努めてきた。また、講座・BP 開催を通して、母親同士が情報共有できる仲間づくりにも焦点を当ててきた。

①　ちびっこ広場

ちびっこ広場は月に１回、１１時から遊戯室で行っている。絵本の読み聞かせやミニ工作など、毎回、企画内容を変えて、親子で一緒に楽しんでいた。また、お誕生会も行うことで、その月の誕生日の子どもはもちろん、他の親子も一緒にお祝いをし、子どもの成長発見の場にもなっている。

②季節行事

季節行事である『ハロウィン』、『クリスマス会』『ちびっこ節分』『ミニひなまつり』では、多くの乳幼児親子が集まり、賑やかに楽しんでいた。

③移動児童館（カプラ遊び）

児童館をより広く知ってもらうために移動児童館を行った。今年度は諏訪木保育園を訪問。『カプラ遊び』は、フランス生まれの積み木を使って、人気の『鬼滅シリーズ』をテーマに、「建物」「昆虫」「列車」の３つの遊びを展開させて、カプラの楽しさを伝えた。

移動児童館をするうえで、密を避ける工夫やこども達が「カプラ」を共有しないよう、分けて行うなどの感染対策をしっかり行ってからの行事だったが、１回きりで終了した事が残念だった。次年度は少しでも回数が増やせる事を願う。

④『子育てオーエンジャー☆みなみ』の方々との共催事業

７月、３月の２回『ほっぺちゃんひろば』を２回開催した。「コロナ禍」であるという事もあって、親子さんの来館様子を見ながら検討した。１回目は「オカリナとフルートの演奏」で親子さんは静かに聞きながら、癒しの時間となっていた。２回目は「鷲尾助産師」による「こどもや旦那さんの愛情バロメーター」を実感し、その上での悩みや突き当たっている問題解決への糸口などを話し合う時間となっていた。来年度も継続事業の予定である。

（２）来期の課題

母親支援と親子のふれあいを重点に、地域とともに講座や広場、行事を少ないけど執り行ってきた。休日を中心に、父親と幼児が一緒に来館する姿を多く目にする。行事や季節のイベントに、父親も一緒に参加する様子も見られた。今後、母親のみならず、祖父母や父親が参加してくれるような行事内容を今後も考えていくとともに、まずは、親子の居場所づくりに努めていきたい。コロナの感染拡大状況をみながら、両親、祖父母の方々にニーズに合った情報収集に努め、次の年度に活かしていきたい。

２．小学生事業

（１）総括

平日は、習い事や学校の帰りが遅くなり遊びに来館する子が少なくなっていますが、核家族化で共働きが多く、子どもたちが日中を安心安全に過ごせる場として、児童センターが『第二の我が家』のように過ごす子どもたちの姿が少なからず見られる。

今年度はイベントやクラブの活動を控えた事もあり、昨年はボランティア活動もほぼ無い状態だった。こどもの一番の楽しみであるイベントの縮小は本当に残念の一言だが、少しづつ何か出来る形を見つけ出し、こども達主体の活躍の場を与えたいと考え行ってきた。

まずは、職員と一緒に季節の壁紙を貼るお手伝い。ハロウィンやクリスマス会の準備のお手伝い。令和３年に入ってからは本格的に「新春お楽しみ会」の１ブースを頼んだり、ちびっ

こ広場のお手伝いなど、自分でも何か出来るという自信を身につけてほしいと願っての 1 年だった。こども達も役に立てる事が嬉しい様子で嬉々と望んでくれていた。

①その他の行事

アリーナが開放されている期間、毎月、『小学生タイム in アリーナ』を開催した。ドッジボール大会、ドッチビー大会、新聞紙雪合戦など、様々な競技に取り組んだ。チームプレーで仲間同士助け合ったり、全力で打ち込む様子などがみられる事も多かった。

季節の行事の『クリスマス会』、は初の「マジックショー」をひまわりクラブと共催で行った。鑑賞型だったので動きはなかったものの、興奮と驚きで盛り上がった。『新春お楽しみ会』でも、子どもたちの特技を取り入れながらブースを担当してもらい、こども達に教える側として経験を積んでもらった。『ファミリーダンス』では、「自治協議会」が主催として地域のこども達が触れ合い楽しむ機会を設けて行った。『ハロウィン』では今年度は「ウィーク」として密にならないよう１週間の設定で行った。幼児親子から中学生まで幅広い年齢層の子が参加し、日ごと変わるミッションを楽しんだ。

（２）来期の課題

子ども一人ひとりの自主性・創造性、社会性、協調性を重視しながら、自分で自由に遊びを見つける手助けをしていくとともに、日々の子どもたちの様子を観察し、変化を見落とさないように、注意深く見守っていきたいと思う。また、日頃から保護者とのコミュニケーションをとることはもちろんのこと、地域の方々にも協力を仰ぎながら、多くの大人の目で子どもたちの成長を見守っていきたい。小学校やひまわりクラブとも情報交換をしながら、連携を密にしていきたいと思う。

３．中・高生事業

（１）総括

中高生の中には、開館当時から長年児童センターを利用している子どもたちが多く、職員との信頼関係も強く、職員と会話を楽しむ様子も見られる。『スポーツ大会』や『アリーナをきれいにしよう』などの行事では、仲間との時間を楽しんでいた。また、中高生タイム（６時から７時）では、アリーナでスポーツを楽しんだり、定期テスト前には、職員に勉強を教えてもらうこともあった。アリーナが中高生でいっぱいになるくらい、スポーツをすることが楽しみで訪れる子どもたちが多いのも児童センターの特徴だと思う。

「児童センターをきれいにしよう！」では、率先して小学生のグループ分けやボランティアとしての活躍をみせてくれた。頼もしい中高生の姿に感動すら感じた時間だった。

（２）来期の課題

アリーナが閉鎖している期間、体を動かす機会が少なくなる。また、利用できる部屋が制限されることもあり、中高生の『居場所作り』が課題になってくる。できる限り子どもたちのニーズに応えていくことで、『居場所』としての役割を果たしていきたいと思います。

４．地域との連携事業

①白根地区社会福祉協議会との共催事業

・今年度は「レクダンス」が中止となったが、「新春お楽しみ会」では「けん玉」や「ヨーヨー」「だるま落とし」などを多く提供してもらい多くの手が共有しないよう、お楽しみ会を安全安心に行う事ができた。

②白根ひまわりクラブ合同事業　【　クリスマス会　】

・2ヵ月に１回「児童センター・ひまわりクラブ合同会議」を行った。こどもの情報共有を通して、お互いの連携を更に密にする事ができた。

・「クリスマス会」を共催で行った。ひまわりの子ども達、児童センターの子ども達合同で楽しさと驚きのひとときを一緒に過ごす事ができた。こども達の本当に嬉しそうな顔を忘れる事は出来ない。また次年度も共同で何か行っていきたい。

③南区自治協議会との連携事業

・ファミリーダンス教室

「地域総務課」の主催でダンスクラブの講師を招いて、ダンスを教わった。

「コロナ禍」での開催に主催者と相談しながら、当日を迎えた。参加者は例年よりは少なかったが、地域のこども達の交流や人気の「ダンス」はこども達にとっても有意義な時間となった。